

勉強「嫌い」「楽しくない」加速

日本の子どもの学力低下を示す国際調査結果が、相次いで公表された。「日本の学力は世界の最上位とはいえない」と総括した文部科学省は「脱ゆとり教育」を加速させる気配だが、背景には、この夏に政治問題化した義務教育費の国庫負担金制度問題の影響を指摘する向きもある。

学力低下批判を受けて文部省は2002年に全国の小中学生約55万人を対象に学力テストを実施したが、一貫して「学力はおおむね良好」の立場をとっていた。今回の総括について、ある教育学者は「遅すぎた総括だが、これで学力政策は新しい段階へはっきりと移行した」と歓迎する。

主要41カ国の学習到達度を数学的応用力、科学的応用力、読解力、問題解決能力の4分野で義務教育終了段階の知識や技能を実生活でどの適度活用できるかを比較した。深刻なのは読解力で前回(2000年)調査の8位から14位に急低下、平均点も522点から経済協力開発機構(OECD)の平均点並みの498点に下がった。数学的応用力も前回の1位から6位にダウンしたが文部省は数学的応用力、科学的応用力(2位)、問題解決能力は1位グループと説明する。平均点や国際順位の低下も深刻だが、それ以上に気になるのは、日本の子供たちの学習に対する意欲や興味の低下、学習習慣の欠如が浮き彫りになったことだ。

優等生といわれた日本の初等中等教育は、大きな曲がり角にある。大学が全入時代を迎え、高校卒業者の就職環境がこれだけ厳しい状況では、進路指導が学力を保証する構造は事実上崩壊した。一方で子供を取り巻く環境は一変した。自然体験や社会体験の機会は激減し、生まれたときから消費社会の真ただ中にある。学習意欲を取り戻し学力を向上させるのは並大抵のことではない。(2004年 12月18日 日経新聞より抜粋)

日本の子供の学力低下は随分前から叫ばれてきました。今の子供は読解力、応用力が失われつつあるようです。受験も今までのように「覚える」問題ではなく「考える」問題へ変化しました。そういった問題に対処できるような対策が必要になります。

2005年1月